

---

# IS～仮面戦士の名を継ぐ者～

宏明

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS→仮面戦士の名を継ぐ者

### 【Zコード】

N4612N

### 【作者名】

宏明

### 【あらすじ】

残念な死にかたをした青年がISの世界にテンプレ転生する物語。ISの作品に仮面ライダーの設定を入れた二次創作です。

## 転生しました（笑）（前書き）

気分転換に転生物を始めました。

転生物、別作品のクロスなどが嫌いな方は戻つて下さい。

## 転生しました（笑）

「此処はどこですか？」

やあ、俺は本郷戒『ほんじょう かい』『気がついたら真っ白な空間にいたんだ。

ちよ、物を投げないで。本当に覚えが無いんだってば。

「君は誰と話しているんだい？」

「うわっ！？ いきなり田の前にイケメンな青年が現れた。とりあえず此処がどこなのか訊いておひげ。

「すみません。此処がどこなのが存知ですか？」

「此処かい？ 此処はね、人間の言葉で表現するならあの世って所や」

「あの世！？ ついて」とまえ俺、死んじやつたの！」

まだ二十歳までしか生きてなかつたのにか！

そりや……あまり良い人生とは言えなかつたけど、死んで変な空間に来るなんて、それなんて一次創作物テンプレだよ。

「まあ……ぶつちやけこれ、小説だし？」

「メタ発言禁止！」

青年の言葉にツツ「ミを入れる。

「……あれ？ 僕、声出してました」

青年は「ゴー」と笑いながら首を横に振る。

「僕は神だからね。君の思つてる事なら何でも分かるのや」

神ーー？ マジでテンプレだよ。

「そ、それで神様。俺はどんな死に方をしたんでしょうか？」

記憶には無いけど、車に跳ねられそうになつた子供を助けたとか？

「ふつ」

笑われた！？

「『めん』めん。つい思い出し笑いをしてしまったよ。君の死に方があまりにも面白かったから」

神様が持っていた杖を振るうと、頭に何かが浮かんできた。

『くつそー両手に荷物を持つてたのに何で俺が痴漢と間違えられな  
いといけないんだよ』

それは此処で目覚める前の俺。

確か秋葉原でIISのDVDや仮面ライダーのフィギュアを買った帰  
りの電車で痴漢に間違えられ、警察署で説教された後の出来事だ。

帰り道の公園で苛立つていた俺が足下の空き缶を蹴ろうとして足を  
滑らし、忘れ物だともしき三輪車のサドルに頭をぶつけていた。

「……何これ」

「ふふ、勿論君が死ぬ直前の出来事さ」

神様は腹を抱えて笑う。

「いへりなんでもこれはないだろ。めっちゃ恥ずかしい。これならまだ知らない方が幸せだよ。」

「それで、神様は何で俺をここに？」

もう様とか付けるのも嫌になつてしまふ、その目的を聞くことにした。

「ああ、君の死があまりにも面白じやない、不憫だったから転生させてあげようと思ってね」

「こいつ、本当に神か？　俺には悪魔にしか思えん。」

「と、こう説で君はこれからこの世界に転生するの？」

「ISがあ…………。俺は仮面ライダーの方がいいんだけどなあ。女にはあまり良い思い出ないし。」

「それじゃ事情説明も済んだし、そろそろ君の新しい物語を始めようか」

え？ については神がチート能力をくれたりするんじゃ？

「あのねえ、いくら神でも一次創作のような力を持つてる訳ないじゃないか。僕は人間の魂を別の世界に転生させる程度しかないよ」

神のやれやれという仕草にイラッつときた。

「さて、僕にも仕事があるからサクサクと進めるよ。君の面白い人生を期待してるから。バイバイ」

神が手を振ると急に足場に黒い穴ができる、俺はまっ逆さまに落ちた。こんなところはテンプレにしなくても良いじゃないかー！

## 転生しました（笑）（後書き）

どうも宏明です。

武神装甲インフィニットストラトスがなかなか進まないので氣分転換に始めました。

相変わらず駄文ですが感想よろしくお願いします。

本郷 戒は改造人間である（前書き）

第一話です。何気に結構残酷な描写がされてるので注意。

## 本郷 戒は改造人間である

インフィート・ストラトス。通称『IS』  
篠ノ之 束という一人の天才少女が生み出したマルチフォームスース。

宇宙での活動を目的として産みだされたが、発表当時は相手にされなかたつた。

誰だつて『現行の最新兵器すら軽く凌駕する』なんて言われたら「小娘ごときがそんな物作れるか」と言ひだらつ。

それから1ヶ月経つた頃、世界に激震が走る。

なんと、世界中のコンピューターが何者かにハッキングされ、2000発以上のミサイルが日本に向けて発射されたのだ。

誰もが日本の終わりに絶望した時、一人の女性がISを纏い、剣と開発途中の荷電粒子砲で全てのミサイルを迎撃して見せた。

世界はその性能に恐れを抱き、捕獲、あるいは破壊しようとしたが、圧倒的な力の差を見せつけられる結果となつた。

世界はIS中心のものへと変化を余儀なくされる。

しかし、ISには重大な欠点が存在した。

それは『女』にしか動かせないという事。

世の男共は空を飛ぶことを奪われ、世界最強の兵器を動かせる女が優遇される時代……女尊男卑社会となつた。

それから10年。ISは兵器からスポーツへと変わり、そこへISを動かした『男』が現れた。

ISを動かした男は15歳の少年。

彼は女ばかりの学園『IS学園』へと入学し、大変ではあるが楽しいスクールライフを送っていた。

しかし、いつの世も優れた物を悪用する者達がいる。

彼らは闇に潜み、今日も罪なき者達を巻き込む。

4月の下旬、桜の花びらがちょうど全部なくなつた頃、神によつて無理やり転生された少年の物語が動き出す。

ドオオオーンッ！！

大空を飛んでいた飛行機が突如爆発する。

「ヒュウッ、たまやー」

それを間近で見ていた女がいた。彼女は蜘蛛のような装甲脚を背中から生やしたI.S.『アラクネ』を操縦し、どにかの軍から盗んだ最新の兵器で飛行機を撃ち落としたのだ。

なぜそんな事をしたのか？ 理由はあの飛行機にI.S.の『コア』があり、それを盗むため。ついでに新兵器の試し撃ちをしたから。

彼女は自分の恋人以外はみんなゴミだと認識している。

だから残酷な手段に躊躇いはしない。

「さてと……後は目標の物を回収するだけだ」

I.S.のコアは特殊な金属で作られているので、この程度で壊れはないのだ。

「へえ……。あの爆発に巻き込まれて生きてるなんてゴキブリみたいな生命力だな」

目標の物の側に着陸した彼女は両手両足を失い、顔の半分が焼け爛れた少年を見つけて感心する。

その少年にはまだ息があった。

彼のお腹にI.S.のコアが埋まつており、奇跡的に生きている。

彼女は少年」と「コア」を回収して自分が所属する秘密の組織『亡國機業』へと帰還した。

目を開けると知らない天井だった。

そういえばこの世界に転生する前にも似た体験をしたな。

とりあえず状況確認だ。両手両足は鎖に繋がれしており、何かの台に俺は寝かされていた。

「ふんッ！」

腕に力を込めると鎖は簡単に千切れた。俺って怪力だつたっけ？

周りを見回す。どうやら此処はどこかの研究所らしい。

「ほほう、目が覚めたかね？ 少年」

ドアが開くと白い髪を生やした老人が入ってくる。服装が白衣から、おやじの研究員だろう。

「あんたは誰だ？ それにこゝは？ なんで俺はこんな所に？」

「そんないつぺんに質問するでない。順を追つて説明してやる。儂は諸星徹夫<sup>もろばし てつお</sup>科学者<sup>じゅぎょ</sup>じゃよ。こゝは秘密組織亡國機業の秘密研究所。お主はモルモットとして重症のこゝろを連れてこられたんじや」

重症……？ そういうえば乗つていた飛行機が眩しい光に包まれた瞬間、意識を失つたんだっけ？

「ぜんぜん体は健康そうだけど？」

ちゃんと手足はあるし、かすり傷もない。

「力力力ツ、お主は爆発した飛行機から奇跡的に助かり足りない部分は儂が作ったんじや。要は改造人間というやつじやな」

転生の次は改造人間かよ。ろくな人生を歩んでないな。

「しかし、なんでモルモット？ 俺はただの人間だつたはず」

何よりあの爆発で生きていたことが不思議だ。

「お主が発見された時、手足は無く、顔の半分は焼け爛れておった、しかもその腹にはヒュの「コア」が入り込み、シールドバリヤがお主を守つたと僕は思つたる。実際、コアはお主に反応したからのつ」

「なるほど、俺は世界で一人目のISを動かせた男つてわけか」

「つむ、結局動かせた原因は解らなかつたがな」

じいさんの説明を聞いてる間に体が馴染んできた。生前よりも力がみなぎつている感じ。

「やのHISのコアは今どこにあるんだ?」

じいさんは薄気味悪く笑う。そして、その事実に俺は絶句することになる。

「お主の腹の中じや。今お主はヒュと融合した世界で初の人型IS  
じやからいのつ」

「マジで仮面ライダーじゃないか。しかも1号。」

「なにはともあれ、いつして生きているわけだし、まあいいか」

俺の超ポジティブ発言こじいさんは驚いていた。

「えらくあつさつと信じたな。普通は発狂してもおかしくないんじやが」

「一度死を体験してるからな。今さらって感じ?」

死んでアニメの世界に転生したんだぜ。お化けだって信じられるさ。

「かつかつかつかつー! む主は本当に面白い男じゃな。ますます興味を持つたぞ。お主、名前は?」

「本郷 戒だ。それでじいさん、俺をどうするつもりだ?」

「なんせやうが悪の組織なら、これから悪事をさせられるだろ?」

「別に何も。儂はただ、人間とEVAを融合させた最高傑作を作りたかっただけじゃ。お主がここから逃げようが儂は知らん。洗脳と裏切り防止の手術を受けたくなければ今すぐここから逃げた方がいいぞ。もうじき幹部共が視察に来る」

じいさんがモニターのスイッチを押すと、ドレスを着た女性とスースを着た女性が映り、すぐそこまで来ていた。

「……俺は逃げる。人殺しの手伝いなんて嫌だからな」

「そうか……。お主の脳には戦い方を叩き込んだある。自分の身くらいいなら問題ないじやうつて。残念なことはお主の活躍をこの田で見れん」とじやな。そこを通路から行けば外に出られるぞ」

じいさんは少し寂しそうに言いながら天井の通気口を指す。

「死ぬなよ、じいさん」

「ふん、若造がいつちょまえに心配するんじやないわい。とつとといけ、しつし」

可愛げのねえじいさんだ。通気口に入り、俺は亡國機業の秘密研究所から脱出を試みる。

「遅かつたな」

本郷 戒が通気口から逃げ出して数分後、ドレスを着た女性とスースを着た女性がラボの中に入ってきた。

「例の坊やが完成したらしいわね。今はどじかしら？ ドクター諸星」

「お主らがもたついたせいで逃げられたわい」

「んだとおー てめえ、あたしらを裏切つたのかい！」

スースを着た女性が諸星の胸ぐらを掴み、持ち上げる。

「はつ、裏切るもなにも儂は初めつからお主らの仲間になつた覚えはないわ。研究のために利用してただけじや」

「いのつ、糞じじーがつ！」

スースを着た女性が剣を呼び出し、諸星を刺そうとしたが、ドレスを着た女性に止められた。

「よしなさいオータム。まだ遠くには行つてないだろ？ から、

あなたは坊やを追いなさい」

オータムと呼ばれた女性は舌打ちして諸星を離し、部屋から出る。

「まあ、坊やの口元には発信器を付けてあるしそうに回収出来るで  
しょ」

ドレスを着た女性の言葉に諸星はクックックと笑う。  
「何がそんなにおかしいのかしら？」

諸星の態度に女性は不快感を隠せずに露べ。

「本郷 戒は儂の最高傑作じや。貴様らいとまに遅れなど取らんよ」

「…………そり」

ドレスを着た女性が右腕を振るひ。

「グウツ！？」

諸星の胸に女性が投げたナイフが刺さり、諸星は倒れた。

「男はやつぱり『ミミ』ね」

女性は汚物を見るような目で見ながら諸星をハイヒールで踏みつけ、部屋を後にする。

研究所内にはサイレンが鳴り響いていた。

本郷 戒は改造人間である（後書き）

どうも宏明です。

いかがだったでしょうか？

感想くれると私のやる気が向上します。

次回はついに初変身。お楽しみに！

見ていてくれ……俺の、変身！（前書き）

悪の秘密結社亡國機業によつて改造人間にされた本郷戒。

諸星博士

見ていてくれ……俺の、変身！

埃っぽい通気口を通る俺は、ある部屋で止まる。

その下には研究員がいた。

「フフフ、よつやく完成した。あのブリュンヒルデのクローンがつ！」

クローンだと。マジで亡国機業はショッカーミたいな組織だな。

「フフフ、これで無知かつ糞アマ共に頭を下げる必要も無くなる。なんせ、世界最強が私のしもべなのだから。フフフフフ、あはははははっ！」

研究員は高笑いをしながら去っていく。

もう通路が無いみたいだし、その部屋へ降りる。

「実際に見るとかなり不気味だな」

部屋の中央には、バイオ液に満たされた筒が五つあり、真ん中の女子だけが人間の姿をしていた。

「行こう。ぐずぐずしてたら奴らに見つかってしまう」

彼女も連れて行きたかったが、今の俺では守りながら逃げるのは無理だ。

「…………」

あ、裸の女の子と目が合っちゃった。

彼女はバイオ液の中にいるのだから服を着てないのは当たり前で、しかも目覚めてたのか目が合つてしまつ。

「は、ハロー」

とりあえず挨拶をしてみたが、彼女は首をかしげて俺を見ている。

どうか、産まれたばかりだから赤ん坊と変わらないのか。

「見つけたぜ、糞ガキ」

部屋のドアが開いてスーツを着た女性が獰猛な笑みを浮かべていた。

ち、彼女に気を取られ過ぎてしまったな。

スーツを着た女性の背中から蜘蛛のよつた機械脚が八本現れた。

「亡国機業のオータム様から逃げられると想つなよ、糞ガキ！」

オータムとかいう女は完全なEIS展開状態になると、装甲脚にある銃口から実弾を撃つてくる。

「うわっ！？」

改造人間となつた俺は何とか避けられた。

しかし、俺が避けてしまつたために、銃弾は後ろの筒に当たつて、ガラスが砕ける。

「しまつた！？」

「他人の心配をしてる暇なんてねえぜ」

彼女の方に意識を向けたとたん、オータムの装甲脚から出た糸に体を拘束されてしまう。

「くそつ、俺のせい……」「

筒から落ちて横たわる女の子がピクリと動く。良かつた、生きてた。

「私を無視してんじゃねえぞ……！」

「げぼつ……！」

オータムの蹴りが俺の鳩尾に入る。  
さらにオータムは蹴りを入れて、サッカーボールのように俺を壁に叩きつけた。

「ヒヤハハハ！ いくらHISと融合してるからって、男が女に勝てるわけねえんだよ！」

「ぐううううう！」

糸が徐々に締まりだし、とても痛い。

「安心しな、てめえは大事なモルモットだからよ、殺しはしねえ。  
だけど抵抗されるのは面倒いからまた手足をもぎ取つてやる」

「ツ……また？」

痛みで気を失うことも出来ず、訊き返すのがやつとだ。

オータムの顔が楽しそうに、そして醜く歪む。

「覚えてねえのか？ お前が乗つてた飛行機をぶつ壊したのは私さ。不幸にもコアが秘密利に輸送されてたせいでお前以外は死んだ。まあ、お前の腹ん中にあるコアのおかげで生きているんだから幸せか。どうだい？ 一人だけ助かつた気持ちは、寂しいかい？ げひやははははっ！」

俺は自然と拳を力いっぱい握り、歯を食いしばる。

こんな外道に俺の家族や身体、無関係な人が何もかも奪われたっていつのかよ。

赦せない。こいつだけは絶対に！

腹の部分が焼けるように熱い。

そして不思議と力が湧いてくる。

俺は立ち上がっていた。

「なんだ？ まだ抵抗するつもりか？ てめえがどんなに頑張ってもアラクネの糸は切れねえよ。諦めな」

そんなことはない。俺はもう、ただの人間じゃないしな。

望んで手に入れた力じゃないけど、俺が尊敬するあの人達と同じ力を持つたんだ。

「ウオオオオオオツ！！」

「男つてのはなんでそんなに見苦しいんだよ。ウゼエ」

獣のような雄叫びをあげながら腕に力を込める。

「ガアアアアアツ！！」

オータムが呆れながら装甲脚の銃口をこちらに向けた。

「うああああああツ！！」

ブチブチイツ！

「なつ、なんだとおーー?」

よつやく俺を拘束していた糸が千切れた。

「は、はん。糸を切つたくらいで勝てると思つなよ」

我を取り戻したオータムは一本の装甲脚で俺に殴りかかってくる。

それをしゃがんでかわし、装甲脚の一本を掴んで背負い投げ。

投げ飛ばされたオータムは空中で体勢を整え装甲脚で壁に着地した。

「おおおおおーー!」

自分でも驚くほど速い突撃。オータムに渾身の突きを打ち込む。

「だから言つただろうが、いくら融合しても男が女に勝てねえつてよお」

「う……」

だけど、その拳は4本の装甲脚によつて受け止められた。

「ハツ、ハアツ！ やつおの返しだー！」

「つおつーー？」

がつちりと掴まれた腕を持ち上げられ、バットのように振り回された俺は壁に叩きつけられる。

「ガツーー？」

くつそ……、こいつ強い。

力は湧いてくるのに全然通じねえ。

「やつぱ、ザコをなぶるのは楽しいなあ。おらー、泣け、卑ひまづけ。そして死ね」

オータムの足が俺の腹や顔を踏む。

フォーマットとファイティングが終りました。

なんだ？ 急に画面が出る。

そりいえばIRSはまず、操縦者の情報をインプットし、IRSが操縦者の事を理解するんだっけ。

そして理解したら最も適した姿に変える。それが『ファースト・シフト』

うーん……。IRSのことなんて全然知らなかつたのに改造されたせいで必要な事はすぐにわかつた。

ははっ、本当に俺は人間じゃなくなつたんだなあ。

でも、そのおかげで俺は今踏んづけている奴を倒せる力を手に入れた。

俺なんかじやあの人達みたいにはなれないだろうけど、せめて家族や一緒にいた人達の仇だけでも取らないとな。画面のOKボタンを押す。

「……その汚い足を退けろよ、オ・バ・サ・ン?」

「ツー! てめえ、私はまだ二十代だ!」

怒ったオータムが足を上げて、頭を踏み潰そうとするのをかわす。その間に最終調整が終わつた。

「悪の秘密結社<sup>ファンタム・タスク</sup>亡國機業、俺はお前らのよつた奴らを絶対に赦さない

「別にお前に赦してもうつ必要はねーよ。一人で何が出来るつてんだ」

「お前を倒すことができる」

そう思つと、オータムは腹を抱えて大笑い。ついでに壁を壊す。

「はははは！ 笑い殺す氣か。ちゃんと現実を見ろよ。それとも頭がいかれた？」

そう思つなり勝手に思つてゐる。後悔しても知らねえからな。

「見せてやるよ。俺の本当の力を」

左腕を腰に、右腕を左肩の前までに上げる。

すると、腹にベルトが現れ中心のエナメルアが光輝く。

「ライダー……」

右腕を右肩まで持つていき、素早くかわしつは逆のポーズをとった。

「変身…」

コアが更に強く光る。俺は黒と緑の装甲に銀色のグローブとブーツを纏い、飛蝗を模した仮面を装着。最後に赤いマフラーが首に巻かれた。

「なんなんだよ、その姿……。ヒンのか？」

あり得ないと言わんばかりに驚くオータム。

「覚えておけ。俺がいる限り、お前達の野望は必ず阻止してやる。」の……仮面ライダーがな！」

「あ、第2ラウンドを始めよつか。

見ていてくれ……俺の、変身！（後書き）

どうも宏明です。

ついに変身しました。見た目は仮面ライダーアクアを参考にしているだけがいいかな。

詳しいことはいずれ設定を載せます。

次回、蜘蛛怪人……じゃなかつた蜘蛛女こと、オータム戦決着。お楽しみに！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4612z/>

---

IS～仮面戦士の名を継ぐ者～

2011年12月21日10時47分発行